

湯沢温泉（山の湯）の歴史

「山の湯」の源泉（湯元温泉）は、今からおよそ八百年ほど前に、越後新発田の高橋半六という旅人が湯沢で病になり、薬草を探して山に入り、偶然発見したといわれています。今でも当時と同じように山中より湧き出す源泉に、一切の加水・加温をすることなく使われています。

江戸時代、徳川幕府によって三国街道が整備され、参勤交代が始まると、温泉のある宿場として、多くの旅人や湯治客で賑わいました。江戸時代に雪国の暮らしや風俗を紹介して、大ベストセラーとなった鈴木牧之著「北越雪譜」の中でも、ここの温泉が湯治場として紹介されています。明治維新の北越戦争を越後長岡藩の家老として戦った河井継之助を主人公とした、司馬遼太郎著「峠」の中でも、江戸に旅する途中、ここの湯に河井継之助が入るが場面が書かれています。

大正時代にスキーが湯沢に紹介され、昭和六年に上越線が全線開通すると、本格的なスキー・温泉地として多くの観光客が訪れるようになりました。

ノーベル文学賞を受賞した川端康成が湯沢を訪れて、小説「雪国」を執筆し始めたのもこのころです。「山の湯」に来る途中の「湯坂」やかかつては「湯坂」側に正面玄関があつた「高半旅館」も小説「雪国」に登場します。

「湯坂」を登りきったところに、「山の湯」の源泉（湯元温泉）の守り神として、ともに歴史を刻んできた「湯本薬師堂」が祭られ、長い湯沢温泉（湯元温泉）の歴史を感じることができます。